

シナイ通信

第10号

平成19年3月31日

NPO 法人 シナイモツゴ郷の会

TEL/FAX 0229-56-2150

MAIL shinaimotsugo284@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚

字小谷地 504-1 鹿島台公民館内



祝結成5周年・祝農林水産大臣賞受賞

全国で評価された「だれでもできる自然再生技術と体制づくり」

シナイモツゴ郷の会は本年3月に結成5周年を迎えました。平成14年3月の発足以来、私たちは自然再生を目指しブラックバス対策や在来魚の復元と真正面から取り組んできました。この間、会員の尽力により多くの成果を得、これに基づいて様々な提言を行ってきました。最近になって私たちの活動と提言は全国的に注目されるようになり、今回、ついに田園自然再生活動コンクールで農林水産大臣賞に輝きました。1月下旬に東京で開催された表彰式には安住理事長以下6名が出席し最高賞の栄誉を讃えた表彰状をいただきまいました。詳細 p2-3

H19 年度総会開催 (2月17日)

2月17日鹿島台の尾根会館で総会が開催されました。委任状を含む55名の参加により活発な議論が繰り広げられました。まず、H18年度決算 H19年度計画および予算が事務局から提案され、議論を経て承認されました。注目のH19年度新規事業は豊かな自然の活用をめざした付加価値米販売支援の取り組みです。

ゼニタナゴ&シナイモツゴ救出作戦 (12月9日)

東北地方の代表的な在来種で絶滅が最も危惧されているゼニタナゴとシナイモツゴ減少の原因究明をするため、12月9日に鹿島台の生息池を池干ししました。市内や仙台から駆けつけていただいたボランティア80名の方々とともに、粉雪が舞う中、池干し作業と調査を行いました。幸い、心配されたブラックバスの侵入は無く、今後、定期的な池干しなどにより底質などの改善が必要と考えられました。

詳細 p3-4

ブラックバス退治本…全国で好評発売中

当会が企画した「ブラックバスを退治するーシナイモツゴ郷の会からのメッセージ」が恒星社厚生閣から11月に発刊されました。全国で大好評です。この本にはブラックバス駆除と在来魚復元について画期的で詳細な知見

と実践的な解説が満載されています。これは当会が2004年11月に開催したシンポジウム「生態系保全とブラックバス対策」の内容を土台に企画し、ブラックバス問題など自然再生と取り組む研究者や活動家に最先端の研究や活動を紹介してもらい、2年をかけて出版にこぎ着けました。執筆には5名の郷の会会員が加わり、近畿大学農学部細谷教授と高橋副理事長が編集しています。これまでに会員が撮りためた水生生物の貴重な写真も収録されています。今、全国の書店で読者の熱い注目を浴びています。

公開シンポジウムへ全国から150名が参加 (11月25~26日)

全国から約150名が参加し、2日間にわたって、熱い議論が繰り広げられました。参加者は研究者、NPO会員、公務員、農業土木関係者、JA職員、農業従事者、市民、大学生、調査会社調査員など様々です。

最初に東京海洋大学の岡本信明副学長が特別講演し、遺伝子から見た生物多様性の必要性をわかりやすく解説しました。また、基調講演としてコイ科魚類研究の第一人者の近畿大学細谷和海教授は田園地帯の豊かな自然を維持するためには外来魚の影響を排除する必要があることを強調しました。

話題提供第1節では、環境保全に取り組む様々な機関から報告がありました。まず、宮城県内水面水産試験場からため池ではブラックバスによる被害が深刻であり、この影響は全国のため池20万個に及ぶ可能性が示唆されました。続いて農業者、全国ブラックバス防除市民ネットワーク、NPO、伊豆沼・内沼環境保全財団が、それぞれの取り組みについて紹介しました。特に、シナイモツゴなど希少魚の保全に参加しているシナイモツゴの郷山谷宮農組合は池干しによるバス駆除など環境保全と一体になった農業と取り組んでいる状況を説明し関心を集めました。また、シナイモツゴ郷の会からは地域の様々な



東京八重洲ブックセンターの店頭に並んだ新刊本

取り組み、伊豆沼環境財団からはバス・バスターズによる伊豆沼におけるバス駆除の実態と効果、全国ブラックバス防除市民ネットワークから全国的なバス防除が市民活動として全国的な広がりを見せている現状について紹介がありました。

第2節ではブラックバス防除後の生態系復元について独自の技術開発と体制づくりを進めている当会から3課題を話題提供しました。まず、大浦氏からは誰でもできるシナイモツゴの人工繁殖技術について、二宮氏からは小中学校を巻き込んだ里親制度について、根元氏からはこれまで困難視されてきたゼニタナゴの人工繁殖のため池を利用して可能にした事例について紹介しました。

第3節の期待される効果では、アユモドキの保護に取

り組む岡山淡水魚研究会から独自の保護技術や付加価値米の販売など興味深い活動について紹介がありました。最後に、当会は、ブラックバス防除や在来魚復元が緊急かつ優先課題であり、豊かな田園の自然を保全することにより付加価値米の創出など産業振興にも大いに寄与することができるので、農業関係者の参加が重要であることを訴えました。

二日目の話題提供では共催のナマズのがっこうが企画した水田魚道による水田の自然再生をテーマに全国の関係者が報告しました。午後の総合討論では会場から外来魚被害の実態など厳しい現状などが訴えられ、市民や農業関係者による長期的な取り組みの重要性が確認されました。

団体（企業）会員募集

だれででもできる自然再生技術開発と体制づくりへ参加しませんか？

○特典：最新情報の提供、共同研究・調査への参加

○資格：賛助会員もしくは正会員

○年会費：1口 10,000円



多彩な報告と熱い議論が繰り広げられたシンポジウム会場

農 林 水 産 大 臣 賞 を 受 け て — 多 く の 人 々 に 感 謝 —

理事長 安住 祥

旧鹿島台町の「シナイモツゴ」が、60年ぶりに鹿島台丘陵地のため池で再発見され、天然記念物に指定されたことを機に、田園地帯の原風景であるシナイモツゴなど外来魚の保護と復元により、自然再生を図り、その水を利用した営農活動により、安心・安全な米づくりを支援することを最終目的にした私共の活動が評価をされ大臣賞を受けることが出来ました。

有志と共に「シナイモツゴ郷の会」を結成しましたが、自然とそこに生息する水生生物相手に多少ならず戸惑いがありましたが、シナイモツゴは勿論のこと、水生生物・生物多様性等の問題については、高橋副理事長の専門知識とこれまでの魚類の研究分野の直接指導を受けながら保護増殖活動を進めて今日に至っています。

特に当時の伊藤克秀校長先生の配慮により、鹿島台小学校4年の総合学習の題材として取り上げ、校舎前の池を観察池として卵から観察飼育することにし、会員も児童の学習に刺激され、採卵技術等も向上し、飼育を希望する多くの学校へ参上し、シナイモツゴの飼育指導にあたってきました。

シナイモツゴの天敵である「ブラックバス」の駆除では、会員は勿論のこと、ため池所在地の山谷行政区の皆さん、自然環境の保全は小学校時代からと、子ども会育成会の親とお子さん方。そして「池干し」後に開催される昼食会の準備、特にヒシご飯・ヒシ餅の準備には、大崎市食生活改善推進員連絡協議会・鹿島台会長の渡辺安子様を始めとする役員の皆様には、土・日の多忙な日を返上しボランティア活動として出席いただきました。池干しは小雨決行ですので、食生活改善推進員の皆様には改めて感謝申し上げます。その他仙台南市の企業の有志の皆さんにもご参加いただきました。

多くの皆様ありがとうございました。

郷の会が「農林水産大臣賞」に輝く

鈴木康文

シナイ通信第10号の記念すべき発刊に併せてビックなニュースを報告いたします。

平成18年度第4回田園自然再生活動コンクールにおきまして、シナイモツゴ郷の会が最高賞の「農林水産大臣賞」を獲得しました。全国各地の農業者団体やNPOなどから57件の応募があった中から、第1回審査会で優良事例に選ばれた後、10月19日に大崎市鹿島台で現地審査がありました。11月8日に第2回審査委員会で各賞が決定され、12月5日に(社)農村環境整備センターから「農林水産大臣賞」に選ばれた旨通知がありました。我々会員は最終8団体の中に入っていればと思っておりましたので、最初はまさかのまさか、夢を見ているようで「本当かなー？」とには信じられませんでした。その後、農林水産省のホームページなどを見て受賞を確かめると一同大喜びでした。

この受賞の報告と共に表彰式及び受賞団体の活動報告(田園自然再生シンポジウム)のご案内をいただき、平成19年1月26日安住理事長、高橋・山谷副理事長、二宮・石井理事と私の6名が参加しました。私たちは早朝のJR鹿島台駅から車中の人となり午前中に会場となる東京国立オリンピック記念青少年総合センターに到着しました。

表彰式では審査委員長の進士五十八(しんじいそや)前東京農業大学学長から審査経過と受賞団体の講評がありました。農林水産大臣賞の当会はため池などにおいて外来魚の駆除や在来魚の復元など生息環境の保全を進め田園地帯の自然を再生する実践的な活動が評価されました。特に、だれでもできる在来魚の繁殖技術を確認し広く公表普及するとともに地元小学校での人工繁殖を支援、シナイモツゴを安全安心のシンボルとして環境に配慮した営農組合と連携するなど、総合的に優れた取り組みをしていると高く評価されました。

授与式では当会の安住理事長が壇上で表彰状を拝受し会場の参加者全員から盛大な拍手をいただき、私たち理事も会場の皆様へ感謝の一礼をしました。午後から、表彰団体の活動報告、意見交換会があり、当会の高橋副理事長が報告説明しました。翌日は田園自然再生シンポジウムが開かれコーディネーターの進行のもと受賞団体に

よる事例報告を基にして活発な議論が展開されました。

この度の表彰式及びシンポジウムに参加して自然環境を十分に活用して農業生産と調和を図りながら各受賞団体がいろいろな取り組みをされ感銘を受けました。また、地域と密着した活動をされている貴重な報告を聞き大変



表彰状を拝受する安住理事長
(東京オリンピックセンター)

勉強になり、今後もこのような機会があれば是非拝聴したいと思います。

各賞と 受賞団体名

- 農林水産大臣賞: 特定非営利活動法人 シナイモツゴ郷の会 (宮城県大崎市)
- 農村振興局長賞: 阿東町土地改良区・阿東町立嘉年小学校・嘉年ゆめ倶楽部 (山口県阿東町)
- 自然環境局長賞: 北御牧のオオルリシジミを守る会 (長野県東御市)
- 朝日新聞社賞: 別俣地区コミュニティ振興協議会 (新潟県柏崎市)
- 子どもと生きもの賞: 北庄中央棚田天然米生産組合 (岡山県久米南町)
- パートナーシップ賞: ブナの実21 (山形県舟形町)
- オーライ! ニッポン賞: 桜宮自然公園をつくる会 (千葉県多古町)
- 美しい郷と営み賞: (審査委員会特別賞) 尾木場地区めだかの里保全委員会 (鹿児島県日置市)

シナイモツゴ&ゼニタナゴ救出作戦: ため池池干し

坂本 啓

平成18年12月9日、シナイモツゴの生息池の1つ桂沢ため池上段の池干しが行われました。このため池ではシナイモツゴが60年ぶりに再発見されるとともに、全国に10ヶ所しか生息していないゼニタナゴやギバチ、メダカ、ジュズカケハゼなど多くの在来魚が確認されています。しかし、ここ数年の魚類調査

でシナイモツゴとゼニタナゴが減少していることが判明し、その減少原因を早急に解明するために今回池干しプロジェクトが企画されました。本プロジェクトは「農村景観・自然環境保全再生パイロット事業」の助成を受けて行いました。この助成金は、ボランティアで作業した時間を労働費として換算し、それに見合

った助成が行われるもので、今までにあまりなかった助成方法をとっています。

当日は助成金の関係で設定した目標人数の60名を大きく上回る80名以上のボランティアの皆さんに参加していただき、環境に対する関心の高まりを肌身に感じることができました。暖冬とは言え当日は雪が降る中をホッカイロの助けを借りながら作業を行いました。午前中に地引き網を行い、シナイモツゴ28尾、ヨシノボリ類34尾、ジュズカケハゼ45尾、フナ類140尾などを捕獲しました。心配されていたブラックバスの侵入はなく、参加者一同ホッと胸をなで下ろしたものの、シナイモツゴはやはり少数しか確認されず、ゼニタナゴは1尾しか確認されませんでした。また、ゼニタナゴの産卵基質であるドブガイなどの2枚貝200個体を調査しましたが、ゼニタナゴ稚魚を発見することはできませんでした。これらのことから両種の繁殖がうまく行われていない可能性が示唆されました。この理由として、病気の蔓延や長期間池干し等の維持管理が行われていないことに起因する水質及び底質の悪化が考えられますが、今後継続して調査し解明していく必要があると思われます。

さて、外での作業を終えた後は、学童農園に場所を移し、食改の皆さんに作っていただいたヒシのチリソース炒めやエビ餅などのおいしい料理に舌鼓をうちました。さらに午後はシナイモツゴに係る研修会が行われ、大浦理事と二宮理事からシナイモツゴや郷の会の活動に関する講演がありました。実際の活動に基づいた笑いを交えての話に参加者の方々も楽しい時を過ごしていたようです。

池干しや生態系復元等の活動を継続していくためには多くの人々の協力が必要です。実際本プロジェクトにも地元山谷営農組合の皆さんの多大な協力をはじめ、様々な人々のご協力を頂きました。郷の会では今後も様々な活動を続けていく予定です。平成19年にはさらに大きな池干しプロジェクトも計画されています。しかし上述した様に多くの人々の協力を頂かなければ、実現は不可能です。皆さん、是非今後の活動にも参加していただくと共に、周囲の人を巻き込んでこの輪をもっともっと大きくしていきましょう。

06年12月10日付け

環境

ゴビ

釣り

中級



今から2年前の春、伊豆沼に向かう車中高橋先生から「バスの人工産卵床を、市販で製作、販売してくれる所を探している。」との話を聞きました。

2004年春に伊豆沼でのバスバスターズ募集で、郷の会メンバーが参加することになり、伊豆沼方式と呼ばれるプラスチックトレイのリサイクル品を使い、人工のバス産卵場所を設置し、卵と親を同時に駆除するというものでした。ただ、この産卵床を組立製作するのに多くのボランティアの方々に製作してもらわなければならず、人が集まらなければ作れないなどの問題もありました。伊豆沼では、400～500個位必要との事。これが市販品ならば、手軽にどの地域でもバス駆除が出来る可能性が高いとのことでした。

人工産卵床を製品化しました 根

元信一 (東北興商株式会社)

私も仕事上プラスチック商品や部材類には知識があるつもりでしたので、二つ返事で私の会社で製作する返事をしたと思います。そして、その商品には、高橋先生が開発(宮城県の特許)した検知センサーを取付ける事にしました。それからが大変、2005年夏ごろから材料をどうするか思案し一体もので製作できそうな会社にお問い合わせ・・・・・・。環境に興味がある会社はいっぱいありますが、いざ製作となると、型代、販売量など計画を出さないと作ってもらえませんので一体ものは断念し、市販の製品の組合せにしました。これも意外と手間取りました。部品の数はあまりないのですが、相手はブラックバスですから、上手く生み付けてくれるかが問題です。

忙しい中高橋先生には時間を作っていただき、私の探した製品をチェックしてもらいながら、製品の寸法、色など部材の選定をしましたが、以外と時間と手間が掛かりました。価格



シナイモツゴ郷の会と東北興商が共同で実用化・製品化したセンサー装着人工産卵床

の関係、各部材の留め方、製作する場所、出荷、ロットの問題、特にセンサーに取り付ける磁石の強度と大きさと留め方には何度もいろいろな磁石を取り寄せ検討しました。価格の問題ですが当初は 2,000~3,000 円位との希望はありましたが、部材だけでその位になり、組立や手間を入れるととても出来ない金額でしたので 5,000 円税込みと設定させていただきました。

いよいよ 2006 年春に伊豆沼に 100 基使用してもらうことになりました。その後、琵琶湖 100 基（内特別仕様 40 基）田沢湖 4 基 請戸川 3 基の注文がありました。製作も何とか設置日に間に合い納入にこぎつけました。この様にいろいろありましたが基本的に初めての商品はこの様なものと私は思っております。

高橋先生をはじめバス・バスターズ、郷の会の皆様に手伝ってもらい、まだまだ完全とはいきませんが何とか商品化にこぎつけました。バスも何基かに産卵し、センサーも 100%反応し初年度としては、上手くいったと私は思っています。

今年 2007 年も環境省九州地方事務所、岡山県などからも注文をいただきました。又千葉県からも注文をいただき全国各地で使用してもらえ事を喜んでいる次第です。この製品の開発、製品化に携わっていただいた方々に大変感謝しており、これから価格や製品の改良など努力していきたいと思っております。（東北興商：022-288-1617）

魚の人 鳥の人

嶋田哲郎 （宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団）

伊豆沼でバス駆除を行なうようになってから、研究者や愛好家をはじめ、多くの“魚の人”とお付き合いさせていただく機会に恵まれています。福島の I さんには「嶋田さんは魚の人でしょ？」と冗談で言ってもらえますが、中には本気の方もいます。バスターズに参加された方から「魚の研究者なのにわからないこともあるんですね。」と言われたことがあります。

私は苦笑するしかありませんでしたが、見方を見ると、私は魚の人にみえる、つまり魚の人に溶け込んでいる、ということになります。たしかにその通りで、魚の人たちと話をしても違和感をおぼえることはありませんし、自分と同じ匂いがすることをよく感じます。私はガンカモ類を中心とした水鳥を研究していますが、魚と鳥とで対象は異なりながらも、生き物好き、フィールドワーク好き、という気持ちが根本にあるからなのでしょう。

魚の人を羨ましいなあ、と思うことは、魚を捕まえて触ることができることです。魚の人はあたりまえと思うのかもしれませんが、鳥の人では普通ありえないことなのです。鳥を捕獲することは法律的に禁止されています。捕獲するには、学術研究を目的とした場合か、山階鳥類研究所から捕獲標識資格を与えられた場合に限られます。それ以外で鳥を捕まえた場合はすべて違法となります。

対象種に触れるか触れないかは、得られるデータの情報量を大きく左右します。双眼鏡や望遠鏡で見ることから得られる情報は、せいぜい個体数、オスメスの違い、成幼の違いなどです。しかし、捕獲できると、体長や体重をはじめ、各部の細かい計測、性成熟の判定、さらに遺伝子解析のサンプルをとることも可能で、要するにいろいろなことができるわけです。このデータ量の豊富さはとても魅力的です。

一方で、魚の人は大変だなあ、と思うことは、魚は捕まえられますが、捕まえなければ何も始まらない、ということです。その池の魚類相を調べる、という目

的を達成するためには、網などを駆使した捕獲、選り分け、集計など、肉体的にかなりきつい作業をとまいます。しかし、鳥類相調査の場合には、その辺に日がな一日すわって、出現した鳥を記録していくだけで、ある程度の識別能力があれば、労せずにデータをとれます。



人工産卵床に設置した刺網で初めて捕獲したブラックバスを手にした鳥の人（手前） 2004 年 5 月

魚と鳥、対象種が違えば調査方法も違いますし、目的に応じた苦勞も違います。どっちが楽しいとかつまらないとかというものではなく、ベクトルが違うということです。結局、その人がのめり込んでしまったものが魚か鳥か、の違いになるのでしょうか。ですから、魚の人も鳥の人も研究のつらさを乗り越えられ、喜々として自分の仕事を話すことができるのだと思います。そういう“熱い”魚の人に多く知り合え、私はとても幸運です。

遠藤理事ご逝去

郷の会結成以来の同志、遠藤富男理事が3月22日に亡くなりました。

2004年秋に健康を害し、その後、時折活動に参加するほど回復しましたが、最近、再度、入院されておりました。

氏は小学校教頭や幼稚園長を歴任して退職後、郷の会発足当初から活動に参加しました。

会の活動を軌道に乗せるため、自ら毎月の定例会議長を務めるなど常に会の中心的な役割を担っていただきました。氏が成し遂げた多くの業績を讃え、会員への心のこもった思いやりに感謝するとともに、心からご冥福をお祈りします。

告別式は3月26日に開催され、安住理事長など多くの理事・会員が出席しました。また、全国の会員から弔電とメールをいただきました。ありがとうございました。

ヒシの利用と復元事業 3年目へ 佐藤 豪一（ひでかず）

私は毎年、広長川の河畔にあるネコヤナギの銀色の穂が出るのを楽しみにしており、またそれを見るたび昨年より早かったとか、遅かったなどと比較していたのですが、今年に限って見に行く時期を逃してしまいました。暖冬と言われているこういう年こそ見ておくべきだったと反省しています。

さて、昨年のヒシプロジェクトは開花期のジュンサイハムシによる猛烈な食害の影響で、収穫を楽しむ余裕が無かったように思われます。しかし、水深20～30センチ程度でも収穫できる事が分かりました。田底を掘り下げること無く、畦畔部分を補強するだけでヒシ田に使える場合があることが分かったのは大きな成果ではないでしょうか。また、地域の商店などにご協力いただき消費者の手元にまでヒシの実をお届けする流れができたことも大きな前進です。それから、鎌田記念ホールで行われている全国菱取り唄大会に初めてヒシご飯とヒシを紹介するパネル展示を行ったのですが、出場者でもヒシが何物であるのかご承知でない方が多数おられました。特に「ヒシは木にできる実だと思っていた。」といわれた時は、これ程までにパネル展示をして良かったなと思った事はありませんでした。

当会ではヒシ栽培に今のところ水田を利用しているわけですが、その水田をめぐる環境が大きく変わりつつあります。詳しい事は省きますが、個別的な水田営農から集落などの団体で水田を担っていくと言うものです。平地に水田を持つ集落はともかく、丘陵地帯に位置する集落では、今までに取

り組んだ経験の無い農作物に挑戦したり、休耕田を再利用し始めたりと、新しい動きが見られます。

そのような折、深谷(ふかや)集落の方からヒシ栽培に使える休耕田を紹介していただきました。さっそく現地確認をし、その後の理事会において平成19年度は大崎市鹿島台深谷集落内の約2,000㎡の休耕田を使わせていただくことになりました。この水田は谷地の最上流部に位置するため、朝と夕方の日当たりは良くないものの農業用溜め池が隣接しています。また下流側の管理水田には深谷集落でコスモスなどの草花を植栽する予定という事です。

しばらく作付が無かった水田のようですが、日本人の主食であるおいしいお米をやることのできる貴重な水田を提供してくださった深谷集落の方々に感謝しつつ、昨年以上のヒシ栽培に関する情報がこの水田から得られるよう有効に使わせていただきたいと思います。



平成19年度シナイモツゴ里親の募集と活動

二宮景喜

春が巡ってきて、今年も本格的に里親活動を始める季節となりました。

田園自然再生活動コンクールでの最高賞受賞は、本会の活動が、全国レベルで認められたことになり、誠にうれしいことでした。その中で、シナイモツゴの里親活動も同時に評価されたものと考えております。豊かな自然を守る活動が、地域全体へ広がり、都会の人々も参加できるような体制になっていることも、評価基準のひとつでした。

昨年の活動では、鹿島台小学校、小野小学校、大倉小学校で、子どもたちに卵から育てていただいた稚魚合計約400尾を回収しました。回収した稚魚の一部は栗原市の溜池に、ナマズのがっこうと協力しながら、地元の玉沢小学校と鹿島台小学校の子どもたちの手で放流し、シナイモツゴの生息域の拡大に取り組みしました。卵から育てる里親校には新たに小牛田小学校も加わり、現在4校になっています。

個人の里親は8名の方に新たにお願ひしました。また、松島五小、笹岳小、鶴谷小も水槽で育てながら里親校として活動しています。大崎生涯学習センター(パレット大崎)と仙台市のスポパークマツモリでも一般の人への展示も兼ねて、里親になっていただいています。

さて、今年度も昨年度に引き続いて日野自動車グリーンファンドの助成をいただくことになり、里親の活動をさらに充実発展させたいと思います。昨年までの里親には継続をお願いしますし、また、新たな里親

も募集いたします。卵から育てる里親の学校については、新たに2~3校募集します。水槽で飼う里親も昨年同様に春と秋の2回に分けて募集する予定です。

さらに、今年は、里親活動の次の発展段階として、



シナイモツゴの生息域の拡大を大きな目標としたいと思います。そのために、溜池などを所有し、本会と協力しながらシナイモツゴを育てる個人あるいは団体を募集しますので、ご希望の方、あるいは関連した情報をお持ちの方は、ぜひ本会へご連絡ください。

里親活動には、育てていただく里親さんのお世話をしたり、サポートをする仕事もたくさんあります。また、小学校などで子どもたちに話をしたり、作業を教えたりする、いわゆるインストラクターの仕事もあります。それはそれで大変楽しい仕事でもありますので、里親ばかりでなく、里親のサポーターも合わせて募集したいと考えております。

シナイモツゴの話を聞いて

平成一八年十一月十日に大崎市立古川第二小学校で里親インストラクター四名が出前講座を行いました。礼状が届きましたので、了解を得て掲載します。

大崎市立古川第二小学校4年1組

鈴木梨花子

シナイモツゴさとの会のみな様へ

先日はおいそがしい中、来ていただき、ありがとうございました。説明がとてもしっかりやすく、シナイモツゴを食べる、ブラックバス、ブルーギルの事、活動の事がよく分かりました。シナイモツゴの名前が品井沼から取られた事を初めて知りました。

シナイモツゴのしんせき、モツゴがシナイモツゴを追いはらったり、ブラックバスが沼の魚を追いかけて食べたのでシナイモツゴがへってしまつたことも分かりました。

ブラックバスたいじの沼ほしをした時、600びき近くブラックバスを取つた、という事を聞いてびっくりしました。

今、品井沼は田んぼですが、シナイモツゴが昔のようにたくさん、どこでもいるようになったらいいなと思います。

平成19年度シナイモツゴ里親募集要項

本会では絶滅危惧ⅠB類（環境省カテゴリー）指定のシナイモツゴの保護をはじめ、ふるさとの環境を守り、生態系を復元するための活動を続けております。

本年度もその一環として、「シナイモツゴ里親制度」の規約のもとに、次のようにシナイモツゴの里親を募集します。

（1）卵から育てる里親 小中高校対象

受精卵を池や大きめの水槽に放流し、孵化から成魚に至るまでの様子を観察しながら、シナイモツゴの増殖に協力していただきます。

募集期間 4月1日から4月9日

（2）水槽で稚魚から育てる里親

一般個人対象（学校も可）



里親小学校の水槽に産卵ポットを収容する子供たち（2006年小野小学校）

稚魚を成魚まで水槽で育て、生態などを観察しながら、種の保全及び増殖に協力していただきます。

○募集期間（年2回 4月15日から4月30日）
2回目は秋に予定

（3）ため池などの所有者または管理者

本会と協力しながらシナイモツゴを放流し、シナイモツゴの生息池を管理します。

○募集期間 4月中

以上の里親をご希望の学校及び個人の方に申込書、説明書など送りますので、シナイモツゴ郷の会までご連絡ください。

なお、里親募集は学校・個人とも宮城県内に限定します。また、学校などを除く里親は本会の賛助会員（年会費1000円）になることが条件となります。

連絡先は1ページに記載しています

平成19年度 年会費納入のお願い

本会は会員の年会費で運営しています。

郵便振込みでお願いします。

振込用紙は公民館にあります。

正会員	2,000 円
賛助会員 個人	1,000 円
団体・企業 1口	10,000 円

ゼニタナゴはシナイモツゴと同様、東北・関東地方の代表的な純淡水魚です。タナゴ類では最もきめ細かなうろこで体を包み、産卵期の雄は胸元を鮮やかなピンクに染めます。秋に産卵し、ふ化した稚魚がドフガイなど二枚貝に寄生すること、底泥中に潜み、東北の厳しい冬を何万年も乗り切ってきた。華麗な風情や特異な生態から人気が高く、伊豆沼や蕪栗沼では消滅後も復元すべきシンボルになっていきます。

現在、生息が確認されているのは秋田、岩手、宮城、福島県の合計十カ所だけで、絶滅危惧（きん）種の中でもとりわけ危機的な状況にあります。宮城県では二カ所に生息していますが、このうち一カ所は旧品井沼周辺のため池です。

二〇〇四年三月上旬、ゼニタナゴの稚魚が寄生するドフガイ二十五個を近隣のため池へ移しました。あらかじめ放流先のため池の調査を行い、ブラックバスなどの天敵が生息しておらず、ドフガイが繁殖しているため池を選びました。

ゼニタナゴの繁殖に必要なのは、品井沼周辺のため池です。シナイモツゴやゼニタナゴをシンボルとして米のブランド化などが検討されています。自然再生により多くの人々が参加すれば、自然の恵みをより多くいただくことができるようになります。

（高橋 清孝・NPO 法人シナイモツゴ郷の会副理事長・奥石養水産研究開発センター勤務・大崎市鹿島台）

石巻河北コラム「つつじ野」に掲載されたシナイモツゴのエッセー最終回（9回目）です。2～8回目をシナイモツゴBCC通信で配信しました。BCC通信を配信希望の方はメールでお知らせください。

里親コーナー

環境教育の一環としてシナイモツゴの飼育を続ける鹿島台小学校の取り組みをご紹介します。

シナイモツゴの飼育から環境教育へ

大崎市立鹿島台小学校

1 はじめに

鹿島台小学校では、魚種名が宮城県の地名に由来する唯一の魚で、宮城県のレッドデータブックの絶滅危惧種に指定されている「シナイモツゴ」の飼育に平成12年より取り組んできました。スタート時は飼育水槽の中だけで飼育されていたシナイモツゴは現在学校池でも飼育され、さらに鹿島台小学校で育ったシナイモツゴが様々な地域の里親に引き取られるなど、シナイモツゴの飼育活動は広がりを見せています。

2 経過報告

平成12年 シナイモツゴの飼育水槽設置 飼育開始

総合的な学習の時間（4年生）に「シナイモツゴ」をテーマとしたカリキュラムを作成。

以降、毎年、4年生がシナイモツゴについての学習に取り組んでいる。

平成13年 シナイモツゴ産卵 4尾ふ化

始。

平成15年 学校池でのシナイモツゴ飼育開始。飼育していたブラックバスの死。

ビオトープ作り（学校近くの横山様所有田利用）スタート。

平成16年 神奈川県相模原鹿島台小学校へシナイモツゴを寄贈*（末尾の注記参照）。

平成17年 古川駅に鹿島台小学校のシナイモツゴ展示。

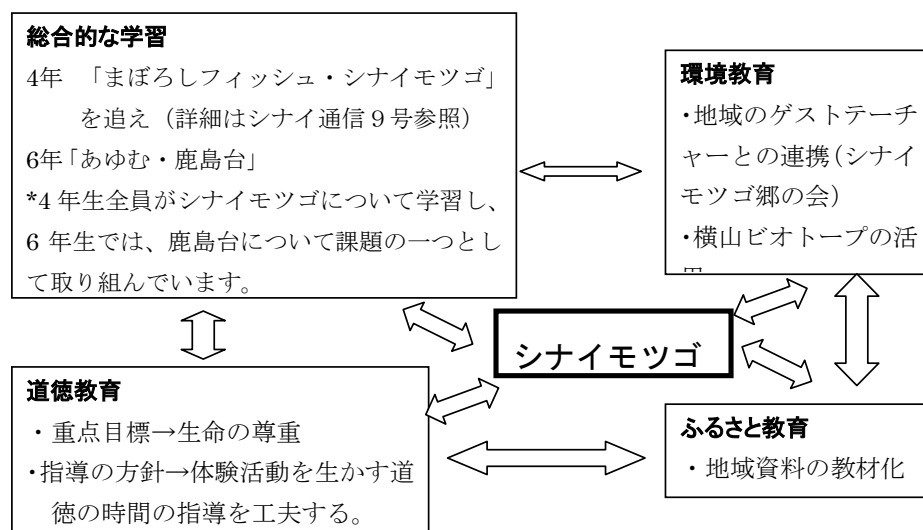
平成18年 栗原市玉沢小学校のシナイモツゴ放流に参加。

この間、各種テレビ番組や新聞などに取り上げられ、多数紹介されている。

3 シナイモツゴを中心とした学習について

シナイモツゴの学習は4年生の総合的な学習で取り上げられてきましたが、シナイモツゴの飼育や横山ビオトープを生活科や理科の教材として活用するようになりました。また、それらの体験を

道徳教育や環境教育にも生かすよう、学校全体で取り組んでいます。



平成14年 鹿島台町（当時）のブラックバス一掃作戦参加。捕獲したブラックバス1尾を飼育開始。

4. おわりに

これまでの学習を展開する様々な場面で、鹿島台公民館やNPO法人シナイモツゴ郷の会のみな様、宮城県水産研究開発センター海洋資源部長高

橋清孝博士 等、たくさんの方よりご協力をいただいています。鹿島台小学校の取り組みが、シナイモツゴを全滅から守り、昔のようにどの川や池でも見られるような環境を作っていく一助になればと思っています。

*シナイ通信編集局注記：その後、平成 17 年に
「シナイモツゴ里親制度規則」ができて県外への移

出は禁止されました。相模原市立鹿島台小学校へ
は放流や移出をしないようお願いしています。

シナイモツゴBCC通信から（NO80：2月6日配信）

みなさま

自然再生関連の会議出席や仙台湾の資源管理調査などであわただしい日々を過ごしています。

仙台湾では海底からマコガレイの卵採取に成功し、20年来の夢であったマコガレイ産卵場を一部ではありますが特定することができました。カレイ・ヒラメ類は普通、浮遊卵を産むのですが、マコガレイはブラックバスやシナイモツゴと同様に沈性粘着卵を産む魚です。彼らは産卵期以外、泥場に広く分散してゴカイの類を食べていますが、産卵期に荒砂との境界面の狭い場所へ移動し集合して産卵することが今回わかりました。彼らの独自に編み出した生き残り戦略に改めて感心させられています。今後、これらの知見を参考にしながら、漁業者と協議して資源回復計画を考えていくことになっています。

イベント情報

①総会開催

2月17日(土)14:00～

鹿島台尾根会館(鹿島台総合支所となり)

・収支決算報告

・H19年度事業計画

(新規事業として付加価値米の認証制度と取り組みます)

②表彰(田園自然再生活動コンクール農林水産大臣賞受賞)祝賀会

2月17日(土)15:00～

鹿島台尾根会館(鹿島台総合支所となり)

会費 3,500 円

新年会を兼ねての開催です。是非、ご参加の上、今年の夢を語り合ひましょう。

③ノーバスネット総会

2月12日(日)東京で開催されます。

ノーバスネット会長の安住理事長と理事の高橋が出席予定です。

成果情報

①田園自然再生活動コンクール表彰式と田園自然再生シンポジウム

1月26～27日に東京代々木オリンピックセンターで開催されました。

多くの会員が駆けつけてくれました。お礼申し上げます。

ブラックバス駆除や希少淡水魚の復元の重要性を訴えてきました。

舌足らずではありますが、農業関係者の方々にも或る程度認識していただけたと思います。

②ブラックバス防除研修会

1月28日(日)13:00～ 宮城県伊豆沼サンクチュアリセンターで開催されました。

坂本理事と高橋が講師で参加しました。

前半の報告で池田さんや私から活動の継続に必要な取り組みなどを紹介しました。

後半のパネルディスカッションでは「伊豆沼自然再生の目標」について自然研の小林さんを座長に迎え熱い討論が繰り広げられました。公開討論としては初めての課題だったと思いますが、データに基づいて現実的な議論が展開され、伊豆沼バス・バスターズの先進性に驚き感心しました。コイ科魚類などの繁殖を促すため、ブラックバスの繁殖阻止を継続するという基本路線は伊豆沼独自のものですが全国的にも導入できる地域が多いと思われます。

③環境省ブラックバス防除モデル事業検討会および意見交換会

1月30～31日に東京で開催されました。

伊豆沼など全国6カ所で実施されている当事業のH18年度結果報告と今後の取り組みに関する意見交換が行われました。

伊豆沼を除く事業は開始したばかりで試行錯誤段階にあり、相当苦戦しているようです。

驚くべき事に多くの地域で人工産卵床の導入を考えています。

伊豆沼方式のマニュアルを熟読して地域の特性を理解した上で導入を図って欲しいものです。また、伊豆沼方式は人工産卵床がすべてではなく、ここでは繁殖阻止をめざしてあらゆる努力が払われていることを理解して欲しいと思います。

④田尻ラムサールフェスティバル

H17年にラムサール指定された蕪栗沼と周辺水田に関するシンポジウムが2月3～4日に大崎市田尻で開催されました。

わたしはリレートークで7分間の話題提供をしてきました。

雁など野鳥と農業の共生をめざす3団体および大崎市の共催によるものです。

冬季湛水田により野鳥の分散を図りながら、農業収入を高めるという方式で経済に裏付けられた保護と取り組んでいます。スケールの大きさと独自性にいつも驚かされます。

シナイモツゴ BCC 通信

会員の情報共有を図るため、毎月2～3回メール配信しています。配信を希望される方は事務局へメールでお知らせください。BCC通信ではシナイ通信をカラーで見ることができます。

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきたいと思います。